ヤコブ１：２２「信仰と善行」

御言葉を行う人になりなさい。自分を欺いて、聞くだけで終わる者になってはいけません。

１　信じる必要

聖書にたくさん良いことが書かれております。だが、ただ聖書を読んでいるだけだったらいけません。信じて、受け取らなけりゃならない。イエスさまが救い主であるという。わたしたちの罪をゆるすために十字架にかかってくださったという。三日目に復活して永遠の命を授けてくださったという。すばらしいことが聖書に書かれてあります。だが、書いてあるだけだったら何にもならない。わたしたちは、それを信じて、自分のものとして経験しなければなりません。

インドネシアの田舎に重たい砂糖キビの袋を背負ってとぼとぼ歩いている人がいた。そこへトラックが通りかかった。気の毒に思った運転手が声をかけた。「荷台が空いてるからお乗りなさい。運んで行ってやろう」　感謝して乗り込んだ。乗り込んだのはいいんだが、荷台の上に仁王立ちになって砂糖キビの袋を背負ったまま脂汗を流してがんばっている。運転手が奇妙に思って声をかけた。「おまえさんはなんで荷物を背負って荷台に突っ立っているんだ？」「荷台に荷物を載せると別料金になるんだろ？　おれは１円も持ってないのだ」　運転手は５分間大爆笑したそうです。

この男の問題は、信頼して重荷をゆだねるということの欠如であります。だが、わたしたちは笑っておれるだろうか。すばらしい聖書の言葉を聞いている。イエスさまのご生涯。イエスさまの十字架。身代わりの罪のゆるし。イエス様の復活。それによる永遠の命。みんな聞いて知っている。だが、信じて、受け取るということをしなきゃ、わたしたちはこの男と同じでしょう。イエスさまが救い主であるにもかかわらず、荷をおろさないでがんばっている。イエスさまが身代わりの十字架にかかってくださったにもかかわらず、荷をおろさないでがんばっている。復活して永遠の命を授けてくださっているのにもかかわらず、荷をおろさないでがんばっている。そんなことがあってはなりません。わたしたちは御言葉を信じて、受け取って、自分のものとして経験しなければなりません。自分の重荷を全部イエスさまへお任せ申し上げるということです。すると平安が与えられます。わたしたちは楽になります。

２　信じたあと

罪の重荷を全部イエスさまにおまかせした。イエスさまが全部ゆるしてくださった。あの罪もこの罪もどの罪も、全部イエスさまがゆるしてくださった。わたしは祝福され愛されている。天国に行くことは間違いない。イエスさまが救ってくださったから、確実に天国だ。信じることができさえすれば、もうほんとうに万々歳であります。しかしここに、信じた後の問題が生じてまいります。

救われて喜んでいる人が混雑している電車に乗った。空いている椅子を見つけて座った。そこへお腹の大きな妊婦さんが乗って来た。救われて喜んでいる人は狸寝入りを始めた。お腹の大きな妊婦さんは全然座ることができなかった。

お腹の大きな妊婦さんにとって、この救われて喜んでいる人の信仰は「まったく何の役にも立たない信仰」でありまして、この世に存在してないのと同じです。大長老ヤコブはこう言うております。「ああ、愚かな者よ、行いの伴わない信仰が役に立たない、と言うことを知りたいのか」（ヤコブ２：２０）

救われて喜んでいる人の信仰。それは、少なくとも当の本人には役に立つ信仰でしょう。イエスさまを信じている。だったら、罪はゆるされておるでありましょう。イエスさまを信じている。だったら、永遠の命が与えられておるでありましょう。イエスさまを信じている。だったら、天国に行くことは確実でありましょう。だから、当の本人の役には立っている。だが、それだけだ。お腹の大きな妊婦さんにとっては、この救われて喜んでいる人の信仰は、全然まったく存在していないのと同じであります。無意味であります。お腹の大きな妊婦さんにとって、この救われて喜んでいる人の信仰は、何の役にも立たないからであります。

大長老ヤコブはこう申します。「わたしの兄弟たち、自分は信仰を持っていると言う者がいても、行いが伴わなければ、何の役に立つでしょうか」（ヤコブ２：１４）　行いの伴わない信仰は、本人だけの役に立ちますが、世界の誰の役にも立ちません。ヤコブはこうも言うております。「もし、兄弟あるいは姉妹が、着る物もなく、その日の食べ物にも事欠いているとき、あなたがたのだれかが、彼らに、『安心して行きなさい。温まりなさい。満腹するまで食べなさい』と言うだけで、体に必要なものを何一つ与えないなら、何の役に立つでしょう。信仰もこれと同じです。行いが伴わなければ、信仰はそれだけでは死んだものです」（ヤコブ２：１５－１７）

３　信仰と舌

イエスさまはわたしをゆるしてくださった。ハレルヤ！　でも、馬鹿って言うと馬鹿って言う。イエスさまは永遠の命を与えてくださった。ハレルヤ！　でも、馬鹿って言うと馬鹿って言う。イエスさまが天国に入れてくださる。ハレルヤ！　でも、馬鹿って言うと馬鹿って言う。行いの伴わない信仰というのは、こういうことでありまして、たとい本気で信じているにしても、救いのお恵みを本当に経験しているにしても、それが外側へちっとも出て来ない。周りの人にとっては、その人の信仰は存在しないのと同然だ、死んでいるのと同じだ、ということであります。

イエスさまはわたしをゆるしてくださった。ハレルヤ！　でも、馬鹿って言うと馬鹿って言う。この、舌を制御するということが一番むづかしい、と大長老ヤコブは申します。こう言うております。「舌は火です。舌は『不義の世界』です。わたしたちの体の器官の一つで、全身を汚し、移り変わる人生を焼き尽くし、自らも地獄の火によって燃やされます」「舌は、疲れを知らない悪で、死をもたらす毒に満ちています。わたしたちは舌で、父である主を賛美し、また、舌で、神にかたどって造られた人間を呪います」

神にかたどって造られた人間を呪う言葉。大言壮語する、ということでありまして、地獄の煙が漂っているような言葉。そういう言葉を、イエスさまを信じていても語ってしまうということがあるのです。クエンティン・タランティーの監督の『パルプフィクション』という映画にサミュエル・Ｌ・ジャクソンが演じますジュールス・ウィンフィールドというギャングが出てまいります。このウィンフィールドという男は殺し屋でありまして、相手を殺す前に聖書をさんざん引用して説教してから銃をぶっぱなすのです。

４　信仰の前進

ですから、わたしたちはもう一歩前進しなけりゃならない。わたしたちは、イエスさまを信じた。罪をゆるしていただいた。永遠の命をいただいた。天国を確実にしていただいた。そっからもう一歩前進しなけりゃならない。それは、「イエスさま、どうかあなたがわたしを全くご支配くださいますように。イエスさま、どうかあなたがわたしを通して生きてくださいますように」という祈りであります。

イエスさま、どうかあなたがわたしを全くご支配くださいますように。イエスさま、どうかあなたがわたしを通して生きてくださいますように。そう祈りますと、イエスさまがわたしたちをとおして善い業を行ってくださいます。「キリストわがうちにありて生きたもう」の境地でありまして、パウロがガラテヤ２章２０節で言うております。すなわち、「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」

テレビドラマ「ドンキホーテ」というのがあります。いわゆる草食系の男子である気の弱い児童相談所の所員と、こわもてのヤクザの親分との間で、魂が入れ替わってしまうというお話です。児童相談所の所員は、外側は気の弱い青年のままなんだが、心はヤクザの親分である。モンスターペアレントなんか平気でやっつけてしまう。ヤクザの親分は、外側はいかついこわもての大男のままなんだが、心は優しい青年である。身を低くし優しく謙遜にふるまってしまう。

これは架空のドラマですけども、イエスキリストの経験は架空ではない。イエスさま、どうかあなたがわたしを全くご支配くださいますように。イエスさま、どうかあなたがわたしを通して生きてくださいますように。そう祈りますと、わたしたちの心の中にイエスさまが生きてくださるようになる。恵みと愛に富みたもうイエスさまが、わたしたちの心を動かし、体を動かし、頭を動かし、手を動かし、足を動かし、目を動かし、舌を動かして、わたしたちを通してすべての善い業を行ってくださる。こうして世界は祝福されます。

結論

わたしたちが救われるのは、行いによるのではない。ただイエスさまを信じる信仰によるのである。そうして、わたしたちが自分をまったくイエスさまにおささげするとき、イエスさまがわたしたちを生きてくださるようになる。その結果、わたしたちはすべての善い業を行うことができるように変えられる。結論としてエフェソ書２章８節から１０節をお読みします。「あなたがたは、恵みにより、信仰によって救われました。このことは、自らの力によるのではなく、神の賜物です。行いによるのではありません。それは、だれも誇ることのないためなのです。なぜなら、わたしたちは神に造られたものであり、しかも、神が前もって準備してくださった善い業のために、キリストイエスにおいて造られたからです。わたしたちは、その善い業を行って歩むのです」　どうか今日、わたしたちはこの御言葉を信じ、この御言葉が今日わたしたちの身の上に実現しますように。祈りましょう。